

怨霊・御霊と「鎮魂」語 —「鎮魂」語疑義考—その3

坂本 要[※]

1 鎮魂研究史から

1) 承前

「鎮魂」という語の使われ方を考えている。すでに2回この誌に連載しているので¹、それを補いながら説明する。鎮魂とは「宮中鎮魂祭」の儀礼のことで新嘗祭や大嘗祭に先立つ儀礼として行われ続けてきたもので、現在まで皇室では行われている。

しかし現在私達はこの「鎮魂」の語を死者を悼む意味に使用している。鎮魂の「鎮」は荒ぶる魂を鎮めると解されて、人生途中で死を迎え無念の思いがまだこの世に残っている戦死者や災害死者に対して用いる語であるとされる。民俗学や歴史学ではこのことを殺されて非業の死を遂げた怨霊・御霊に対する観念や信仰の成立に関連して説明している。この説は現在の私達も広く認めるところでもあり、昨年3月11日の東日本大震災以降この語が新聞紙上に氾濫しているのも事実である。鎮魂の語が感覚的には非業の死者に対する恐れの観念というより、死者一般への哀悼の意にさらに変化しているようにも見受けられる。実はこの死者への鎮魂の語は明治時代から散見するものの急速に使用され出すのは1970年頃からで、使用例の数も宮中鎮魂から戦死者等の鎮魂に急速に転換していく。さらに現在死者一般への哀悼の意へと変化しつつあるのかもしれない。連載「その1」の「鎮魂語の近代」で新聞や雑誌記事索引等を参考にしながらそのことを述べた。

連載「その2」の「研究史に見る鎮魂語」では鎮魂祭や鎮魂という観念がどのように解釈されてきたかを、幕末以降の研究史をたどって探ってきた。というのはこの鎮魂という観念を正面に据えたのは、折口信夫の民俗学で、折口はその範を平田篤胤・鈴木重胤をとっている。また鎮魂論をまとめたのは国学者の伴信友である。そのことから鎮魂解釈を幕末の国学者から始め、折口信夫・柳田国男・筑土鈴寛・堀一郎・五来重と順を追って取り上げてきた。そこで問題になったのは宮中鎮魂が死者鎮魂に変わったとするならば、いつどのような契機で変わったのかである。歴史学では奈良時代から平安時代にかけての怨霊・御霊信仰の発生に求めている。民俗学では折口信夫・五来重がその観念・信仰の担い手として遊び部という集団を想定して鎮魂がひろまったとしている。

※筑波学院大学経営情報学部教授

2) 鎮魂祭の成立

「その2」の「5小結」では鎮魂に「宮中鎮魂」と「死者鎮魂」「芸能鎮魂」を別に考えるべきだと提案した。また天皇祭祀の鎮魂祭についても鎮魂の意味が不明確で多義的であることを補足し、次のような言葉で終えた。

「最後に宮中鎮魂に話しは戻るが、この概念の混乱のもとには鎮魂そのものにタマフリとタマシズメの二つの読みが記されていることに起因する。常識的には奮い立たせると鎮めるは相反する行為である。折口は統一的に理解しようとしたが、鎮魂祭そのものの成立時点で三つくらいの儀礼もしくは観念の複合であるとする見解が強い。」

これは松前健氏の説である²。三つとは1、招魂儀礼（魂の招き返しの呪法）2、蘇生の呪法3、病氣治療術（離魂病）である。同様のことを藤野岩友氏は「鎮魂の語義とその出典」³で日本の宮中鎮魂儀礼が中国の招魂と鎮魂の語が混用されているからであることを指摘している。また松前健や新井喜久夫は物部氏が奉じる石上神社には別の鎮魂法があったこと、宮中鎮魂以外にも民間に鎮魂法があり病氣治しに用いられていたとして、このことも宮中鎮魂祭の成立に影響を与えたとしている⁴。

幕末の国学者鈴木重胤の説を見てみよう⁵。鈴木重胤は鎮魂祭を猿女君と物部氏の所伝とを分けて考えている。「猿女君の所伝は離遊の運魂を招鎮るもので物部氏の所伝は大病坐ず大御寿永く久しく坐む術としている。」別の箇所では「天鈿女の伝る所は尋常の鎮魂祭なり、饒速日命の行ふ所のは若痛む處有は此十寶を振りて鎮めよ、如此せば死人も生返らむと宣る表物にて常と変との差別也。此を打合せて其より後の祭式は定まれる。」天岩戸が先で十寶を振ることが後に加わったとしている。すなわち天岩戸の神楽があり、そののちに筥を振って鎮魂する法が加わったもので、筥を振るのは物部の法で病氣にあらず長生きをさせる法であるということである。この物部の法は生き返らせる蘇生の法でもあり、岩戸の神楽は遊離魂を招き鎮めるものである。鎮魂を遊離した天皇霊を招く神楽だけでなく蘇生法でもあるとしている。この説は折口信夫の鎮魂説に発展する。

このように宮中鎮魂祭は中国の招魂法や民間の病氣治しを取り入れながら天皇霊の再生儀礼として徐々に成立していったため、矛盾をはらんでいた⁶。

2 怨霊・御霊と「鎮魂」語

1) 怨霊・御霊信仰研究史から

死者に対する鎮魂としては怨霊・御霊信仰が考えられる。黒田俊雄「鎮魂の系譜」⁷に代表されるように、怨霊・御霊に対する鎮魂概念の発生を王権（天皇制）維持の概念と規定している。しかしそのことの可否を問う前に怨霊・御霊に対して鎮魂という言葉が用いられたのだろうか。このことがこの節の主題になる。というのはこの連載をするにあたって、鎮魂の語をとりあえず東大史料編纂所の古記録フルテキストデータベースの索引で取り出そうとした。もちろんこのデータベースが「大日本古記録」を基にしているため史料が限られているのだが、一応

の目安として引いてみても宮中の鎮魂祭関連以外にこの語の使用例は出てこなかった。『六国史』の関連記事をあたっても、「怨霊・御霊を鎮魂す」という表現は見当たらない。「大日本古文書」・「寧楽遺文」・「平安遺文」等でも同様である。ないということを証明するのは難しいが、死霊に対して「鎮魂」という語が一般的に使われていたということはないようである。常識的に怨霊は鎮魂するもの、鎮魂した怨霊を御霊として祀るものという語の使われ方を想定していたので、結果は意外であった。

しかし「研究史から見た鎮魂語」にみるように折口信夫・五来重以外の研究者は怨霊について鎮魂という言葉を使うことには慎重である。柳田国男・堀一郎しかりである。柳田国男は慰撫・鎮静・送却・祭却の語を、堀一郎は鎮送・鎮遏（ちんあつ）・鎮祭・調伏である。前号では堀が「熟さざる用語」として鎮送呪術の語を使用したという経緯を述べた。

御霊信仰研究の草分けである村山修一、柴田実も慎重であった⁸。柴田実は「祇園御霊会—その成立と意義—」1954の中で、慰和・遷却の語を⁹、村山修一は『日本都市生活の源流』1953の中で鎮斎の語を、『天神御霊信仰史』で鎮撫・鎮謝・慰和・慰撫の語を、重ねて使用している¹⁰。同じ1953年に堀一郎は鎮送の語を使用した。三氏とも鎮魂の語を使用せず、造語もしくは歴史用語からの転用としてこれらの語を使用したのは、それなりの意図があったと考えられる。それは文献に「怨霊を鎮魂す」とはでてこないからであろう。鎮めてのち、慰めて祭るとか謝すという言葉があるので、それぞれの研究者は文献にみられるような鎮謝・鎮撫・調伏というような語を使用しているか、鎮祭・鎮送の語を勘案している。（鎮祭については後述する。）

2) 怨霊関連史料から

まず東大資料編纂所のデータベースから「鎮魂」の語を引いてみると¹¹、古記録フルテキストデータベースでは54件、大日本史料総合データベースで239件・平安遺文フルテキストデータベースで20件・鎌倉遺文データベースで4件が打ち出されるが、すべてが宮中鎮魂祭に関しての事項であり、怨霊・御霊に関する記事には連動していなかった。『続日本紀』にみられるように意図的に怨霊記事を外したこと¹²があるにしても、怨霊・御霊については鎮魂の語を使用しなかったといえよう。逆に怨霊・御霊から引いても鎮魂の語はでてこない。『大日本史料』の網文に「怨霊を鎮す」の語がでていたが、これは大日本史料として編纂を始めた1901年以降の表題に使った語で、古代中世の語ではない。「鎮」で引いて出てくる語は先述の研究者の使った「鎮祭」・「鎮謝」・「鎮撫」の3語である。

「鎮祭」は地鎮祭・安鎮祭の部分語としてでてくるので、この時代に「鎮祭す」という動詞では用いられていない。

「鎮撫する」は中世の用語として多く出てくるが古代の鎮撫使の語にあるように、治安維持の役職で、撫は「押さえつける」という意味で使用している。現在使われている「なだめる」の意味とは少し異なるように思える。

「鎮謝」の謝は「あやまる」「わびる」で、鎮めてあやまるという意味であり、「陳謝する」

なわち「わびをのべる」ことの誤記でもない。『類聚国史』延暦十九年（800）の条に怨霊とされた早良親王や井上内親王を山稜に祀りなおす記事で「陰陽師衆僧を率て、淡路国に在る山稜に鎮謝せしめ」とある。このような例は多い。『六国史索引』では「鎮謝」の語が22例挙げられている¹³。

また早良親王すなわち崇道天皇を淡路島に祀る話で『日本後紀』延暦十八年（799）二月十五日の記事に「傳燈大法師位泰信等於淡路国。令資幣帛謝」とある。幣帛をたまい（崇道天皇霊に）謝せしむの意である。同じく延暦廿四年（805）四月五日の記事には「（崇道天皇）の怨霊に霊に謝す」とある。謝はすなわちあやまるで、他にもあるが略す。

また同じく『日本後紀』延暦廿四年（805）二月六日の記事に幽閉された井上内親王・他戸親王の怨霊を鎮めるために建ててられた奈良五条市靈安寺について「読大般若経読、小倉於靈安寺、納稻世束、又別収調綿百五十斤傭綿百五十斤、慰神霊之怨魂也」神霊の怨魂を慰めるなり、とある。このように怨霊に「謝す」「慰す」の表現が多い。

3) 調伏

「調伏（ちょうぶく）」は従わせることで、中世の戦乱の世になると多く用いられた語である。「じょうぶく」とも言い心身を整えて相手を降伏させるということで、元は仏教語である。不動調伏法がもっとも一般的で、病気の邪気祓いまたは出産時の邪気祓いに行われた。

『小右記』永祚元年（989）七月廿八日の記事に「使阿闍梨勝祚、率二口伴僧、限七个日不動調伏、依物恠夢想不快」物恠はモノノサトシと読みいわゆる物の怪で阿闍梨勝祚と二人の僧が不動調伏法を行ったとある。このような記事は平安期多く見られるが、『平家物語』の巻七「還亡（げんぼう）」に次のようにある。還亡とは奈良時代の僧玄昉のことで、藤原広嗣と対立し筑紫に流されるが、広嗣の亡霊があらわれて、広嗣を調伏しようとしていた。

玄昉の首をとって雲の中に消えたという恐ろしい話である。「天平十六年（742）六月十八日筑前国見かさ郡大宰府観世音寺供養ぜられる導師には玄昉僧正とぞ聞こえし。高座にのぼり、敬白の鐘うちならす時俄に空かきもり、雷ちおびただしう鳴て、玄昉の上におちかかり、その首とって雲の中にぞ入りける。広嗣調伏したりけるゆえぞ聞こえし。」とある。鎌倉時代に入ると敵を調伏す、とか調伏之矢というように敵を退治するという意味になっていく。能の「調伏曾我」も仇敵の工藤裕経を調伏するという劇になっている。中世になると怨霊は退治されるものという性格は強くなる。

面白いのはこれと同じ話が『今昔物語』にある。巻第十一の「玄昉僧正互唐傳法相語」に吉備真備が広嗣の怨霊を鎮めることとなり、「吉備宣旨をうけたまわり、西に行きて広継が墓にして陳じけるに、其の霊して、吉備ほどほどしく鎮めらるべかりけるを、吉備陰陽の道に極めたりける人にて陰陽の術を以て我が身を怖れなく固めてねんごろにをこつりこしらへければ其の霊止まりけり。其の後霊、神と成りて其の所鏡明神と申す是也。」

怨霊は吉備真備に鎮められ止まって神になったという話である。

このように怨霊から転じた御霊は「鎮めて、謝し、慰めて、祀る」というのが平安時代の表現であり、中世になると「鎮撫」「調伏」の語が使用されて押さえつける退治するの感が強まる。

3 再び幕末国学から

1) 尊王思想と御霊

怨霊・御霊が問題になるのは尊王思想の高まった幕末国学の動きである。鎮魂に類した「御霊（みたま）を鎮める」「鎮斎」「鎮祭」等の語がさまざまに使われたのもこの期からである。「その2 研究史からみる鎮魂語」で取り上げたがもう一度そのことを考えてみよう。本居宣長などの国学者は霊魂観を神々との関連で世界観として提示している。本居宣長は世界を「顕事」と「幽事」に分け、平田篤胤は幽事を幽冥界としてカクリヨ即ち死後の世界とした。『霊の真柱』下つ巻で「墓所に葬（かく）すも鎮（しず）まり坐す」の語がでてくる。墓所は鎮まるところという観念である。篤胤の文に「霊の行方の安定を」とあり、「安定」に「しずまり」の振り仮名をふっているが、死後の世界を魂の「鎮まる」理想的世界としたのはこの期の国学者たちの共通した感覚である。

ここまでは「その2 研究史にみる鎮魂語」で述べたことで、このあとに怨霊・御霊について論じたが、「鎮魂」という語をキーに史料を読み直してみる。

この幕末期に崇徳天皇のことが論議されている。この経過は山田雄司「崇徳天皇神霊の還遷」に詳しい¹⁴。まず崇徳天皇の御霊について述べた平田篤胤の『玉櫛総論追加』¹⁵を見る。

「崇徳天皇の社を大炊通の東に建て、尊霊を慰めたてまつる。」p 644-11行目

「光明院と号して、尊霊を鎮めまつり、法施不退の霊場となしたまえり。p 646-4行目

「是れ讃岐院の御霊なりとて宥（なだ）め進らせむ為に」p652-9行目

「崇徳院と祝い奉り。宇治左大臣をも神に崇められける」p652-10行目

等である他に保元物語・源平盛衰記・平家物語の引用があるがこの表現におさまる。ということで、平田篤胤の崇徳天皇の事項に関しては「鎮魂」の語はなく、鎮め・慰め・なだめ・崇めるの表現で、中世文献にでている用語の範囲内である。

次に崇徳天皇の御霊を京都に還遷することを図った中端雲斎以下について見る¹⁶。幕末の国学者の間では尊王思想を崩壊させた淵源を保元の乱の平家にまで遡り、崇徳天皇が讃岐に配流されたにことが武士政権誕生の端緒になったとしている。したがって崇徳天皇の御霊を奉りなおすことは、尊王行為としてはじめにやらなければならないことであるとする考えがあった。中端雲斎はその先頭にたって、京都に崇徳天皇を祀る白峰神社を建てようとする。その関連で崇徳天皇の御霊について多くを述べる。「崇徳天皇の御神霊を慰め奉らせ給えば」「天皇長き歳月の御怨念（いかり）も御忿悲（いかり）も忽に和（なご）ミ解させ給い」¹⁷とあり、御霊にたいしては「慰め・なごむ」の表現である。

次に祭政一致や神祇官の復興に尽力した矢野玄道が書いた、復古神道に基づいた政権構想ともいえる「猷芹庵語（けんきんせんご）」¹⁸の中の御霊について触れよう。「荒ぶる神や服従（ま

つろ)はぬ神も皆この道を以って天下を教化し国家の安静をもたらせんとする」趣旨が述べられている。そのため「藤原広嗣・橘奈良麿・橘逸勢・文室太夫等の御霊社に祭られしも」「宮中に一殿として御奉仕あそばされたき事」と提言している。この文にも鎮魂の語はない。

もう一件、大国隆正の慶応3年(1867)「神祇官本義」¹⁹についてであるが、これは祭政一致を統治の中心として設けようとした神祇官の規範を示すものであった。その中に「いまも猶鎮魂祭をもて神祇官の要務とす。」とあり、「鎮魂祭の主意をしるすべきなり。」として「魂魄・大忠大孝・天神地祇」を挙げている。魂魄は天皇の魂魄で、魂魄を振るわせる鎮魂祭をもって忠孝と天神地祇の信仰を結びつけようとしたものである。また「八神殿は神祇官の本主にてあればなり」と宮中鎮魂祭の八神殿を言っていることから、この鎮魂は御霊鎮魂ではなく、宮中鎮魂祭をさすと考えられる。

宮中鎮魂祭を強化して国家祭祀の中心に据えたいとの主張である。山田論文²⁰ではこれを御霊の鎮魂と解釈しているが、幕末のこの期には御霊に対して鎮魂という言葉は使わなかったと考えられる。

2) 津和野国学と鎮斎・鎮祭

関連して神葬祭について補足する。神葬祭については「その1 鎮魂語の近代」の「5 神葬祭と鎮魂」で述べたように、神葬祭では鎮魂という言葉は使わず、遷霊という語を使う。霊が鎮所である墓所に遷るという意味での遷霊である。

尊王運動は仏教排斥に結びつき葬式仏教を批判し、その結果神葬祭をあみだす。戊辰戦争の戦死者を葬する際も仏式でなく神式を選んだ。それが後の靖国神社につながる招魂社の設立である。文久2年(1862)京都霊山の霊明舎に招魂社を設けるのだが、この神葬の考えは津和野藩において起こる。中心になったのは福羽美静・大谷秀実の津和野藩士である。翌文久3年(1863)津和野藩の藩士が京都祇園神社の境内に招魂の小社を建てる²¹。その時奏上された祝詞に「御霊乎同社爾鎮斎国忠璽報伊」すなわち「御霊を同社に鎮斎し、国忠に報い」と読める。ここで鎮斎という語が用いられている²²。また津和野では死者を祀る社として祖霊社・総霊社を作る動きが神葬とともにひろがるが、その際も鎮祭の語を用いている。

ただ神葬祭の遷霊の時、神依板を中啓(扇)で叩くということがある。これは宮中鎮魂祭の和琴を模したものとしている。明治6年の教部省の設けた宗教政策である「十一兼題」には神仏共通用語として葬儀のことを鎮魂とっている例がある。少しあとになるが大正11年の落合直文編の『日本大辞典言泉』では神葬祭のことを鎮魂祭としている。宮中鎮魂祭と神葬祭を意図的に混同したためかはわからないが、明治になってから葬儀を鎮魂祭としてみるものがあつたのかもしれない。(「その1 鎮魂語の近代」参照)

3) 権田直助と鎮魂帰神の法

「その1 鎮魂語の近代」を書いている中で明治以降の新聞記事索引で鎮魂の語が初見するの

は明治9年（1876）6月20日の相模大山の広告にある「大山鎮魂祭」の記事であるとした。これも幕末からの国学運動のひとつと見られるので補足しておく。権田直助は文化6年（1809）今の埼玉県毛呂山町で生まれ、漢方医をめざすが、納得できず皇朝医学という日本古来の医術を学ぶべく平田篤胤の門下になる。幕末の尊王運動にかかわり、明治になると征韓を企てた嫌疑で幽閉され、赦免後相模大山神社の祠官となる。ここで行ったのが病氣治しでもある、鎮魂帰心の法である。権田の書には「霊魂帰着考證」「魂心気略辨」がある、そこには「魂の人身より離れたる後」のことが書かれている段があり、このような離魂の病を治すのが、鎮魂帰神の法で石上神社の鎮魂法をもとにしたものである²³。この鎮魂帰神の法は明治時代に入ると古神道として諸派が用い、大正から昭和にかけての大本教事件につながる。

4 まとめ

1) 「鎮魂」語史

以上3回連載をまとめてみると次のようになる。

鎮魂の語は「大宝令」の神祇令に「寅日鎮魂祭」職員令に「神祇伯 掌鎮魂」とあるのが初見で以降の格式に定められ、故実書に解説されている。²⁴六国史、各種古記録にあることは既に述べた。鎮魂の語はこの宮中鎮魂祭のことをいっている。宮中鎮魂祭とは別の物部の鎮魂の儀のあったことは伴信友・鈴木重胤等の幕末の国学者の述べていることで、鈴木重胤は蘇生法でもあったという。この説をさらに進めたのが折口信夫で、殯の時にこの鎮魂が行われたのではないかとした。五来重も同様の説をとる。ただ両者は『令集解』の「凶穢魂を鎮むる」の語を以て「鎮魂」としたので厳密にいうと「鎮魂」という熟語ではない。

これ以外には「鎮魂」という言葉は宮中鎮魂祭を指す語以外はでてこない。

現在一般には「怨霊・御霊を鎮魂する」という文脈がよく用いられるので、その関連を探ってみたが、結論としては怨霊・御霊に対して歴史書の中では鎮魂という言葉を見出せなかった。「慰める。祭る。鎮謝す。鎮撫す。調伏す。」である。特に「鎮謝す」は多い。「鎮めてわびる」の意味で、現在一般用語としては用いられていない語である。「鎮撫」は鎮め押さえるで「調伏」は従わせるという意味で、この二語は中世になってから怨霊・御霊に対して使われるようになる。

一方鎮魂は江戸時代まで宮中鎮魂祭を表す言葉であり続けたが、武士が力を持ち天皇の力が弱くなるに従って一般には忘れられた語であったと思われる。事実大嘗祭が執り行われなくなり、その前段の儀礼である鎮魂祭を中断した時期もあった²⁵。

この鎮魂の語が意味を広げて復活するのは幕末である。まず尊王思想から宮中鎮魂祭を神祇官の本務としようとする大國隆正の意見。崇徳天皇にみるように御霊として扱われた天皇霊の復活を画した中瑞雲斎の動き。次に仏教葬に対して墓を魂の鎮まる所とする神葬祭運動。民間に伝わっていた鎮魂帰神の法の復活をいう古神道復興の動き等が挙げられる。しかしこの段階でも鎮魂は宮中鎮魂祭の意味であったが、神葬祭では鎮斎・鎮祭の語が使われる。墓をみたま

の鎮まる所としたのは平田篤胤であるが死者儀礼を鎮魂と意識するのはこの頃から始まったとも思われる。

明治期の日清戦争から戦死者にたいする語として鎮魂の語が新聞に用いられるようになる。鎮魂は横死者に対して使うという意識があると思われる。この時点で戦死者の怨霊を鎮魂するという観念があったのではないかと思われる。しかし日露戦争以降天皇が靖国神社を親拝する等で靖国神社に対する国家の関与が強まるにしたがって、戦死者には招魂・慰霊の語が用いられ、戦死者を怨霊扱いにする鎮魂の語は用いられなくなる。一方明治22年から新嘗祭にともなう鎮魂祭が正式に復活し²⁶、宮中祭祀としての鎮魂祭の語が新聞にでるようになる。

ただ外国の葬儀に「鎮魂祭」の語を使用したり、音楽のレクイエムを「鎮魂曲」とする例をみる。これは葬儀や死者を悼むことの翻訳語として鎮魂の語を新聞記者が使ったように思える²⁷。前述したように神道家に神葬祭を宮中鎮魂祭に模すという考えもあったようである。このように一般死者の葬儀または死者悼む意味で鎮魂を使う例も散見するようになる。

この鎮魂の語が急に増えるのは1970年以降で、その原因として靖国神社の参拝問題で靖国神社の絶対性が崩れたことがその一因とみられるが、梅原猛や谷川健一等の怨霊鎮魂におどろおどろしいイメージをもってブームを引き起こしたことも挙げられる。その論拠には折口信夫をはじめとする民俗学者の、「鎮魂」語の敷衍化という過程があった。現在鎮魂の語は横死者の霊を鎮めるということも薄れて、一般に死者を悼むというような意味に用いられているのではないだろうか。以上が「鎮魂」語の変遷である。

2) 近代語としての鎮魂

鎮魂という語を調べ出したのは筆者が念仏踊り等の民間念仏の研究を進める中で、この鎮魂の語を確定しようとしたことに始まる。というのは「念仏踊りは鎮魂の踊り」とするのが定説であったからだ。この説は折口信夫・五来重によることはすでに述べた。いずれも『令義解』『令集解』を根拠にしている。殯は死者再生を願う儀礼とするか死霊鎮めの儀礼とするかで両者の論は分かれるが、遊び部という歌舞の徒が葬儀に踊ったとすることは記事にあり、それが宮中鎮魂につながる儀礼であり、またこの徒の末裔が神楽の巫女や念仏踊りの聖につながるとしているというのが両者の論である²⁸。鎮魂ということでは宮中鎮魂・死者鎮魂・芸能鎮魂は通底している。御霊会に多くの歌舞が風流として登場するのも鎮魂のためとしている。

しかし鎮魂という語は宮中の鎮魂祭の意味以外には使われなかったのではないかというのが、今回の結論である。いや鎮魂の意味があったのではないかという弁明も考えられる。鎮魂の意味とは死と再生とか擬死再生の儀礼的意味が鎮魂祭にあり、それが民俗的伝統として通底しているのではないかとする見方である。70年以降の文化人類学理論の導入によりこの説は広く受け入れられるようになった。しかしその時代、語として用いられていないというのは決定的である。鎮謝・鎮撫・調伏には鎮謝・鎮撫・調伏という意味があり、その当時の鎮魂祭の意味とは異なって用いられたからである。御霊会の風流も念仏踊りもしかりである²⁹。

もう一度考えると私達が用いている「鎮魂」という語は近代に意味を変えて用いられている語である。宮中祭祀の鎮魂祭が怨霊の鎮魂に、さらに死者供養の鎮魂に鎮魂の対象をずらしながら用いられてきた。現在私達が使っている「死者を鎮魂する」は最近発生した。その意味で鎮魂は近代語もしくは現代語である。「怨霊・御霊を鎮魂する」「死者を鎮魂する」という用語は近代に生み出された用語であり、しかもこの用語は民俗学が造ったということになる。

註

- ¹ 「鎮魂語の近代―「鎮魂」語疑義考その1」『比較民俗研究No25』2011年3月
「研究史にみる鎮魂語―「鎮魂」語疑義考その2」『比較民俗研究No26』2011年6月
- ² 松前健「鎮魂呪術の原像」『古代伝承と宮廷儀礼』p113
- ³ 藤野岩友氏「鎮魂の語義とその出典」『国学院雑誌』No69-11国学院大学1968年11月
- ⁴ 松前健「宮廷鎮魂祭と石上の鎮魂祭」『古代伝承と宮廷儀礼』新井喜久夫「遊び部考」『続日本紀研究』No9-9通巻105号
また「1鎮魂語の近代」で述べた幕末から明治にかけて古神道が取り入れた鎮魂帛神法は多くはこの石上神社の鎮魂法によっている。
- ⁵ 『鈴木重胤全集 第十一巻』「延喜式祝詞講義十二巻下 十六鎮魂祭」1939 鈴木重胤先生学徳顕彰会
- ⁶ 鎮魂祭における御服箱を震動させる、木綿の糸を結ぶ等、個々の儀礼の成立過程については新谷尚紀「大和王権と鎮魂祭」『国立歴史民俗博物館研究報告』No152 国立歴史民俗博物館2009に詳しい。
- ⁷ 黒田俊夫1982「鎮魂の系譜―国家と宗教をめぐる点描―」『歴史学研究』No500→『著作集3』法蔵館
- ⁸ 村山修一『日本都市生活の源流』『天神御霊信仰史』『天神信仰』柴田実『中世庶民信仰の研究』『御霊信仰』。
- ⁹ 柴田実「祇園御霊会―その成立と意義―」1954で使用している。その論文の別の個所で御霊会にともなう歌舞について、「歌舞はより古くからの鎮魂の要件であった」の語がある。
- ¹⁰ 鎮斎は『日本都市生活の源流』1953 p16に「怨霊鎮斎」の語を使用している。鎮撫以下は『天神御霊信仰史』の中から。ただしその書で一ヶ所「鎮魂」の語を使っている。(p50) この本は1996年刊で鎮魂の語が一般化してからの出版である。研究者が鎮魂の語を使用するのも1970年以降急に増える。(その一、その二参照)
- ¹¹ 怨霊関係の史料文献の出典については山田雄司の『崇徳院怨霊の研究』『跋扈する怨霊』を参考にするとともに、東大史料編纂所の「古記録フルテキストデータベース」「大日本史料総合データベース」「平安遺文フルテキストデータベース」「鎌倉遺文フルテキストデータベース」等を利用した。
- ¹² 桓武天皇が編纂を指示したといわれる『続日本紀』は早良親王の祟りに関する記事は削除さ

れている。

- ¹³ 『六国史索引三 日本後紀続日本後紀日本文徳天皇実録索引』 p 302 吉川弘文館1958
- ¹⁴ 山田雄司「崇徳天皇神霊の還遷」大濱徹也編『近代日本の歴史的位相』1999刀水書房
- ¹⁵ 名著出版版『新修平田篤胤全集』第6巻1952によった。
- ¹⁶ 中瑞雲斎については山田雄司「崇徳天皇神霊の還遷」宮城公子「幕末国学の幽冥観と御霊信仰」桑原恵「尊王攘夷運動の思想—中瑞雲斎を中心に—」に詳しい。
- ¹⁷ 中瑞雲斎「窓廼獨許登（まどのひとりこと）」『熊取町史紀要第二号 中瑞雲斎関係書簡集』大阪府熊取町教育委員会1988
- ¹⁸ 矢野玄道「猷芹 簷語（けんきんせんご）」芳賀登・松本三之介編『日本思想体系 国学運動の思想』1971岩波書店
- ¹⁹ 「大国隆正 神祇官本義」『日本近代思想体系 宗教と国家』1988岩波書店
- ²⁰ 山田雄司「崇徳天皇神霊の還遷」
- ²¹ 加藤隆久「津和野に於ける総霊社と祖霊社」『神道津和野教学の研究』「津和野の国学と岡熊臣」阪本健一「神道家・国学者としての福羽美静」『明治神道史の研究』
- ²² 加藤隆久「津和野に於ける総霊社と祖霊社」『神道津和野教学の研究』 p 223
- ²³ 権田直助に関しては神崎四郎編『國學体系20巻 権田直助集』及び桜川一昭「覚書・権田直助伝（1）～（7）」『東国民衆史No3～10』に詳しい。
- ²⁴ この件は新谷尚紀2009「大和王権と鎮魂祭」「鎮魂関係基本史料」に詳しい。
- ²⁵ 寛正4年（1463）から元文5年（1740）に中断されていた可能性が高い。川出清彦「鎮魂祭古儀考」
- ²⁶ 明治22年宮中賢所御三殿新築にともない綾綺殿で宮内省が行うようになった。川出清彦「鎮魂祭古儀考」
- ²⁷ 津城寛文は『祭・芸能・行事大辞典』の「鎮魂」の項でく近代になって西洋音楽が輸入され、「死者のためのミサ曲」が「鎮魂曲」として受用されたことを契機に、鎮魂に「慰霊」の意味が付与された>として死者鎮魂をミサ曲の訳語に求めている。
- ²⁸ 折口信夫は「上代葬儀の精神」「芸能史六講」等を参考。五来重1953「遊部考」新井喜久夫1987「遊部考」
- ²⁹ 念仏には往生や歓喜踊躍という意味がある。念仏と踊りが別立てであることは以下の論考に記した。坂本要「若狭の六斎と念仏」『まつり』No66 「三信遠大念仏の構成と所作」『民俗芸能研究』No50

参考文献

新井喜久夫 1987「遊部考」『続日本紀研究』No9-9通巻105号 続日本紀研究会

加藤隆久 1983「津和野の国学と岡熊臣」『維新前後に於ける國學の諸問題』國學院大學日本文化研究所

- 1985『神道津和野教学の研究』国書刊行会
- 川出清彦 1989「鎮魂祭古儀考」『神道史研究』No27-2神道史学会→1990『大嘗祭と宮中のまつり』名著出版
- 神崎四郎 1944『國學体系20卷 権田直助集』國民社創立事務所
- 黒田俊夫 1982「鎮魂の系譜—国家と宗教をめぐる点描—」『歴史学研究』No500→『著作集3』法蔵館
- 桑原（寺脇）恵 1986「尊王攘夷運動の思想—中瑞雲僨を中心に—」『歴史学研究』No553→『幕末国学の諸相』2004大阪大学出版会
- 五来重 1953「遊部考」『仏教文学研究第一集』仏教文学研究会
- 坂本要 2004/12「若狭の六斎と念仏」『まつり』No66まつり同好会
2011/3「三信遠大念仏の構成と所作」『民俗芸能研究』No50民俗芸能学会
2011/3「鎮魂語の近代—「鎮魂」語疑義考その1」『比較民俗研究No25』
2011/6「研究史にみる鎮魂語—「鎮魂」語疑義考その2」『比較民俗研究No26』
- 阪本健一 1983「神道家・国学者としての福羽美静」『明治神道史の研究』国書刊行会
- 桜川一昭 1980/6～1984/3「覚書・権田直助伝（1）～（7）」『東国民衆史No4～10』武蔵書房
- 柴田実 1954「祇園御霊会—その成立と意義—」『京都大学読史会五十年記念国史論集』京都大学読史会→『中世庶民信仰の成立』角川書店1966→柴田実編『御霊信仰』1984 雄山閣出版
- 新谷尚紀 2009「大和王権と鎮魂祭」『国立歴史民俗博物館研究報告』No152 国立歴史民俗博物館
- 津城寛文 2009「鎮魂」『祭・芸能・行事大辞典』朝倉書店
- 藤野岩友 1968/11「鎮魂の語義とその出典」『国学院雑誌』No69-11国学院大学
- 松前健 1974『古代伝承と宮廷儀礼』塙書房
- 宮城公子 2004「幕末国学の幽冥観と御霊信仰」『幕末期の思想と習俗』ぺりかん社
- 村山修一 1953『日本都市生活の源流』關書院→復刊国書刊行会1974
1983『天神信仰』雄山閣出版
1996『天神御霊信仰史』塙書房
- 山田雄司 1999「崇徳天皇神霊の還遷」大濱徹也編『近代日本の歴史的位相』刀水書房
2001『崇徳院怨霊の研究』思文閣出版
2007『跋扈する怨霊』吉川弘文館